

滝澤：それではお集まりいただきましたので、ただ今より、平成 26 年度の佐賀大学教育功績等表彰者との懇談会を開始させていただきます。お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

まず最初に、この会の目的は、教育功績等の表彰を受けられた先生方との情報を共有して、大学全体や学部の教育改善の事例として少し記録に残して、それを公表するというこ  
とで、大学全体の教育改善に資すればということで行っております。本日の参加者は、受賞された先生方と高等教育開発室のメンバーということになっております。それでは開始に当たりまして、教育委員会の委員長をされております瀬口先生の方からご挨拶をいただきたいと思  
います。よろしくお願いします。

瀬口：皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました教育委員長の瀬口です。このたびの佐賀大学学長賞の受賞、本当におめでとうございます。教育委員会を代表して、一言、受賞された先生方に対し、お祝いと感謝を申し上げます。

まずは、本学の教育の充実、発展に顕著な功績を挙げていただきました工学系研究科の渡邊義明先生、また、授業の実践面で優れた成果を挙げていただきました文化教育学部の石崎誠和先生を代表とするだんだんまるまるワークショップ・グループ、それから医学部の村田祐造先生、工学系研究科の奥村浩先生、農学部の小林元太先生、全学教育機構の青柳達也先生、そしてアドミッションセンターの西郡大先生に対して、心より敬意を表すると同時に深謝を申し上げます。

先生方もご承知のように、佐賀大学は平成 18 年に佐賀大学憲章を制定し、その中で「教育先導大学」、すなわち教育を通して社会の発展に貢献する大学を標榜しております。従って、本学の教育の活性化を図るということは、本学にとって最も重要な課題の一つでございます。こういった本学の使命をご理解の上、目に見える顕著な成果を挙げていただいた先生方に対して、あらためて御礼を申し上げます。

00 : 04 : 56

ご承知のように、昨年 11 月に公表されました文科省の国立大学改革プランでは、平成 28 年度以降の第三期中期目標に向けた国立大学の在り方というものが現在問われております。こういう状況の中で、本学においても大学の機能の強化という観点から、種々の教育改革の取り組みを現在進めているところでございます。

この取り組みの精神は、やはり直接教育に携わっていただいている先生方の教育に対する実践的な取り組みに大きく依存していると言っても過言ではないと思っております。こういう観点からも、今回、先生方によって挙げていただいた非常に優れた教育上の功績あるいは成果というものは、今後の本学の教育活動の核となり、さらには教育のより一層の活性化、あるいは近い将来、国内外で活躍する人材の育成にもつながっていくものと確信しているところでございます。

どうか今後とも、先生方には本当にお手数をお掛けすることと思いますが、今までどお

り、本学の教育の推進役としてご協力とご支援を賜りますようお願いを申し上げて、甚だ簡単ですが、私からの挨拶とさせていただきます。本日は本当におめでとうございます。どうもありがとうございました。

滝澤：どうもありがとうございました。それではこれから懇談会を開始させていただきますが、開始に当たりまして、まず簡単に自己紹介を少ししていただければと思っております。

私は高等教育開発室の室長をしております、工学系研究科の滝澤です。よろしくお願いいたします。それでは申し訳ないのですが、では順番にお願いいたします。

石崎：文化教育学部で美術・工芸課程で日本画を担当しています、石崎誠和と申します。よろしくお願いいたします。

村田：医学部医学科で、2年生の教科の肉眼解剖と並ぶ顕微解剖学の方を主に担当しております准教授の村田です。よろしくお願いいたします。

青柳：私は、デジタル表現技術者養成プログラムの中で身体表現入門という授業を持っています。非常勤講師でございますけれども、青柳といいます。よろしくお願いいたします。

宮脇：文化教育学部の宮脇です。昨年に続いて座談会に参加させていただいて、勉強して帰りたいと思います。以上です。

中村：経済学部の中村と申します。よろしくお願いいたします。

帯屋：工学系研究科の帯屋と申します。初めて参加させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

山内：高等教育開発室の教員をしております、山内と申します。よろしくお願いいたします。

皆本：工学系研究科の皆本でございます。全学教育機構の併任教員でもあります。よろしくお願いいたします。

西郡：アドミッションセンターの西郡です。全学教育機構の併任教員でもあります。

小林：農学部の小林です。今日は「悠々知酔」の製造をしています。お酒造りでいろいろと教育に役立っています。よろしくお願いいたします。

奥村：工学系研究科知能情報システム学専攻の奥村と申します。この中には同学科の先生が3人もいらっしゃるので、普段の会議と代わり映えしないなあという気がします。よろしくお願いいたします。

渡邊：同じく工学系研究科知能情報の渡邊と申します。よろしくお願いいたします。

00:09:54

滝澤：どうもありがとうございました。それではまず、それぞれ表彰を受けられた先生方から、ご自身の取り組みの内容等を少し紹介していただければと思っております。5分弱程度で内容等をご紹介いただいて、その後、それに関して少し質問等をお受けして、お答えいただくという形で進めさせていただきたいと思っております。

まず最初ですけれども、1号表彰を受けられました工学系研究科の渡邊先生、よろしくお願いいたします。

渡邊：この研究というか、この取り組みは2000年ぐらいから始まりました。当時、インターネットが急激に普及しまして、学内でも先生方、学生さんから、インターネットを自由に使わせたい、使いたいという希望が非常に大きくなりました。

ただ、そうやって使わせると、今度はいろいろなはずら、トラブルが頻発しまして、それが全部、情報センターの方に集中しまして、何という教育をやっているのだということになりまして、何とかしなければいけないということです。自由に使わせる、自由にICTの教育環境を重視させるということと、きちんとしたセキュリティを守って使わせる、マナーを守って使わせるという方向をどうやって調整するかということです。

学生さん、それから各学部等で自由にいろいろな端末が、それこそ千差万別な端末が重なってきますので、端末自身にそういう機構を入れるのはとても無理だということで、ネットワークの途中でそういうチェックを入れて、おまえは誰だということを確認するようなシステムを作ろうということで始まったものです。

当時、ネットワークをフリーなスペースにおいて使わせるというのはやっと始まった段階で、ほとんどそういうことに対応したシステムがありませんでした。だから、調べてはいましたけれども、結局なくて、自分たちで作り始めたということです。幸いなことに、それが十数年、このすごい情報環境の変化にもかかわらずちゃんと使われてきているというのは、自分ながら驚いているところです。

無線LANというのも開発当時は全くなくて、それから何年か後にやっと登場したもので、その上でもちゃんと動くということでした。そういうことなので、無線LANを全学的に整備して情報教育環境をもっと重視しようということも当時始めましたけれど、それも全国大学でもトップを切って始まったところです。

現在でも一応使えはするのですが、だんだん最近のタブレット系の端末に対しては少し齟齬が見えてきましたので、また新しいシステムを開発したりしています。それからまた、私自身がそろそろ定年ですので、次のことをどうするかということも議論している最中ではあります。私の取り組みは、どちらかといえば教育実践そのものというよりは教育環境の充実ということでした。以上のようなことです。

滝澤：どうもありがとうございました。渡邊先生には情報基盤センターの方でセンター長をやられた当時にこれに取り組みまれておられたということですか。

渡邊：そうですね。

滝澤：それ以降、ずっと取り組みられておられる。

渡邊：はい。

滝澤：佐賀大学は、全国でも非常にICT環境が整っている大学として認められているようですが、そういったところの基盤は最初のここにあったというようなことなのでしょうか。

渡邊：そういうことです。

滝澤：何か先生方の方でご質問等ございましたら。

中村：非常に便利に使われて良くなったなと思っているのですが、よくこういうシステムを作ったときに、今、最後に言われたように、内部でやってしまうと特定の人がやられるので、なかなか変えていくとか引継ぎが難しいというので、どうしても外注ということを知るので、その点について心配は当初なかったのですか。内部でやってしまうと、自分がいなくなるともう誰も分からなくなって、そのまま使われなくなるとか、そういう心配は最初されなかったのでしょうか。

00 : 15 : 10

渡邊：当然、心配はしました。だから外から持ってくる方がそれは良かったのですが、なかったのも、しょうがなく作ったということです。それで、今みたいに自分がいなくなればどうしようもなくなるということに対応するために、これはいわゆるオープンソースとして公開しています。全世界のどなたでも見て、開発に参加できる形でオープンソース公開して、うちだけではなくて、他でも使われています。だから、私がいなくなっても誰かが引き継いでくれる可能性はあります。熱心にやっている方は何人かしかいませんのでちょっとどうなるか分かりませんが、可能性はあるということです。

それからもう一つは、もう今はこういう環境が当たり前になってきましたので、何もこのシステムを使わなくても市販のシステムを入れれば何とかできるということで、近い将来は恐らくそういう市販システムへの入れ替えを考えようということになると思います。

滝澤：その他、何かご質問等ございましたら。一番苦労された点はこういった点ですか。やはり前例のないところで作られるというのが非常に難しかったのでしょうか。

渡邊：どちらかという楽しんで作ったという方が(笑)。とにかく自由に使わせろ、どんどん使わせろというのと、おまえら何やっているかというクレームとのはざまでもどうしようもなくなってという感じがありましたけれど、その後、作り始めたら非常に面白く、プログラムは好きですので、それからずっと、進化してきていますということです。

滝澤：その他、何かご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは続きまして、2号表彰の先生方の取り組み内容のご紹介をお願いいたします。ではまず一番最初に、文化期養育学部の方で、これはグループとしての表彰ですけれども、だんだんまるまるワークショップ・グループの代表の石崎先生の方からお願いいたします。

石崎：よろしく申し上げます。こちらは佐賀大学美術館開館記念特別展として企画させていただきました。大学に美術館ができるということが全国的にめずらしいことで、大学が美術館を持つということはどういうことなのかということも議論しました。その結果、やはり地域に開かれたということが一番重要な命題になってくるということ、そして同時に美術自体も開かれているということが重要になってくるという思いを共有しました。その中で、何をやったらいいかという議論を重ねまして、附属学校園、学生と、そして美術・工芸課程の教員が連携して、段ボールという身近な素材とダンゴムシという身近な生き物をテーマに展覧会を行いました。

約5カ月間、5月ぐらいから学生とミーティングを始めまして、7月には巨大なダンゴム

シを学生と一緒に作って、それを附属幼稚園、附属小学校に持ち込み授業で登場させて、ダンゴムシのいる世界を大きな紙に描いてもらいました。そして今度はその大きな絵をきっかけに学生とともに美術館で段ボールを使って空間を作っていました。その過程で、一般の人にワークショップを開催し、子供たちとその親御さんと一緒に空間を作っていました。このような制作過程はインタラクティブな、相互作用的なものとなって、いろいろな方に協力してもらいながら、巻き込みながら作っていくことになりました。このような制作スタイルは、美術・工芸課程としても初めてでしたし、私としても普段は日本画を一人で制作しているのでワークショップ等は初めてだったのですけれども、やらせていただきました。

段ボールという素材と、ダンゴムシという生き物の吸引力というものが、かなりあることが実感できました。そして子どもたちも、その空間に入り込んだときには恐る恐る入っていくのですけれども、途中からはもう制御ができないぐらい子どもたちが動き始めて、主体的に何かを発見してくる姿が見られまして、その辺がすごく良かったことかなと思っています。以上です。

00 : 20 : 41

滝澤：どうもありがとうございます。それでは何かご質問等ございましたら、どうぞ。

帯屋：まさにこのごろ必要性をかなりいわれている PBL (Problem Based Learning) を率先してされているということだと思うのです。美術ですので全部が PBL というのもいえると思うのだけれども、そのように座学でなくて、学生とか子どもたちをいろいろ目の前で動かしながら教育をしていくという、いろいろご苦労もあると思うのだけれども、われわれもそれをこれからどんどん導入していかなければいけないというところにあると思うのです。何かその辺でこういうことをやればいいのかというのがご経験の中からあれば、教えていただければと思うのです。

石崎：学生は最初、非常に受け身ですので、最初は最小単位のグループで、少しリーダーシップを持てるような学生が中心になってもらいました。最初はダンゴムシの巨大なもの、4m ぐらいのダンゴムシを 2 体作るのですけれども、1 体は教員だけで作って、その隣で学生だけに任せた 1 体を作ってもらいました。教員が少し先行してやっていって、学生は教員が見ていない間にやるという感じで進みました。先生が見ていない間にやるということが大切だったかなと思います。

どこかでまねをして、どこかで自分たちはここをやるのだという主体性を発揮していくということがまず 7 月にあって、それが子どもたちの前に見せたときに、子どもたちの反応を見て、それが響いていく。むしろ教員よりも、学生たちが作った方が響きました。それが実感として非常に良かったのではないかと思いますので、やはり小さなところ、簡単なところを用意してあげることが非常に重要だと思いました。また 2 ヶ月の展覧会で最終地点は結構大きな造形物になってほしかったのですけれども、造形物をそちらの方向に持っていくために、先生が考えたことに操られているのではないようにしていくことが一番難

しい所でした。私は小さな主体性をどんどん積み上げていくことを工夫していきました。成功体験をどう積み上げて行くかが非常に難しく、課題もたくさん見つかったと思っています。

帯屋：だから最初は動かなくて、途中から動き出すというお話ですよ。

石崎：そうですね。

帯屋：そのタイミングを見るというのが一番大きな仕事のような気はするのだけれども、何かそこを見るところのポイントはありますか。

石崎：美術では毎回そこが一番の仕事になると思います。とにかく待つことが重要なのですけれども、学生に発見させたときに、学生が見つけたのだということを強く言うことを意識していたかと思います。

帯屋：ありがとうございました。

滝澤：どうぞ。

皆本：先ほどから空間という言葉がよく出るのですけれども、もう少し具体的に想定されている空間がどういうものか、ダンゴムシの空間と言われてもちょっとピンと来ないので、その辺をちょっと具体的に教えていただければと。

00 : 24 : 44

石崎：美術館の 3 分の 1 の空間を使って展覧会をやるということだったので、巨大なダンゴムシを作ることによって、自分たちのスケールが小さくなって感じるという空間をまず想定することによって、それほど大きい空間ではないのですけれども、ダンゴムシの世界観に入り込むというような空間設定をまず考えました。

それが段ボールでできていくのですけれども、例えば大きな切り株、直径 3~4m の切り株を 2 階建て、3 階建てにして、それに滑り台を付けて、またはダンゴムシが冬眠するような建物というか 2 階があって、屋根に登れて、中にダンゴムシが眠っているようなところがあって、トンネルでそれにつながっているというようなことで、子どもが体験できるような空間設定をしていきました。ちょっと分かりにくいかもしれませんが。

滝澤：よろしいでしょうか。その他、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。ではどうもありがとうございました。

それでは続きまして、医学部の村田先生、お願いいたします。

村田：村田です。そこに書かれてありますように、卒業予定者対象アンケートで選ばれたものなのですけれど、私の方は先ほど申しました顕微解剖学（組織学）以外にも担当科目数が多くて、実際には 1 年生の細胞生物学ユニット 3、2 年生で組織学、神経解剖学、発生学、4 年生で神経解剖実習をやっております。あと PBL のチューターも、3 年生か 4 年生の担当ですけれど、今年は 3 年生担当でやる予定です。それと、学生が講義のない時期に来て単位を取る選択コースというのがあります。基本的には 6 年生ですけれど、最近は 2 年生とか 3 年生の夏休みとか春休みに来て、一緒に研究して単位を取るという指導をしています。

ということで、学生と接する機会が非常に多いので、そういうことで選ばれたと思います。私としてはどういうことに心を注いでいるかといいますと、やはり 2 年生の最初に組織学実習で 3 か月間、週に複数回講義、実習で顔を合わせますので、そのときに学生が質問できる雰囲気をつくるということを念頭に置いてやっています。

実習ですので、スケッチを書かせますが、各学生が実習をやっているときに横から見ながら「ここはどうなっているの?」という質問を投げ掛けたりしています。そのようにすると学生もだんだん慣れてきて、何も言わなくても学生から質問してくるようになりますので、どんどん楽になってきます。

それから、講義・実習以外の時間でも、学生が来たらできるだけ対応するようにしています。また、選択コースで来た学生についても非常に楽しく研究ができるような環境をできるだけつくるように心がけています。学生の様子を見ながら、できるだけうまく対応できるようにということを行っております。以上です。

滝澤：どうもありがとうございました。何かご質問等ございましたら。よろしいでしょうか。

医学部は 1 学年 100 名ぐらいいるかと思うのですけれども、実習のときも 100 名を相手にずっとされるような状況になっているのですか。

村田：そうですね。入学者は 106 人ですけれど、大体 120 人ぐらいいます。それを 4 人のスタッフで担当しております、全員で対応しています。私は学生から質問があり手を挙げるとそこに行って、学生がはっとするようにできるだけ答えを導かせるような対応をしています。そのまま答えを教えるのではなくということに気を付けて、私は対応しています。

滝澤：他に何かご質問等ございますか。

皆本：具体的に質問の数はどれぐらいでしょうか。

00 : 29 : 52

村田：実習のときは、構造的に複雑な組織、臓器になるとよく来ます。講義の後となると、やはり学生ですので試験前が多いです。講義でしっかり話したはずの内容を頻繁に質問されることがありますけれど、対応しております。

皆本：講義で 1 回話したような内容について、「これは講義で話したような内容だからノートを見返しなさい」という感じではなくて、丁寧に教えるという感じでしょうか。

村田：そうです。一応質問内容を聞いてみて、分かっているなということになると、資料を出しなさいと言って広げさせて、ここに示しているでしょうという感じです。

滝澤：その他、何かご質問等ございませんか。学生からのそのような質問は随時お受けになるのですか。それともオフィスアワーか何かを決めてやっているのですか。

村田：オフィスアワーは設けてはいますが、学生は自由に来ます。私も実験とかしていなければ即座に対応します。実験とかしているときは「2 時間後に来るように」というように対応しています。

滝澤：学生数の割合でいうと、どれぐらいの学生が質問に来るものですか。

村田：120 人いますけれど、大体 15 人ぐらいになるかと思います。延べにするともっと多くなります。

滝澤：他、よろしいでしょうか。

奥村：うちの学科では、質問に来る子は意外とできる子、ある程度できる子が多くて、むしろ来てほしい子が来ないというような傾向があるのですけれども、医学部はそういうことはないですか。

村田：それはありますけれども、日頃の実習等での接触が多いおかげでしょう、基本的理解のできていない子も来てくれます。できる子も来ますし、できる子は私のところ、および教授のところに発展的な高度な質問に来ます。

滝澤：よろしいですか。その他、何かご質問等ございましたら。よろしいでしょうか。ではどうもありがとうございました。

では続きまして、工学系研究科の奥村先生の方から取り組みのご紹介をお願いいたします。

奥村：本当は資料をお配りするのが一番で、百聞は一見に如かずで良かったのですけれども、先ほどの学長との会合のときに全部配布し終わってしまいましたので、残部がございません。誠に申し訳ございません。

受賞対象はシステムの開発をして、それをより使いやすようにしたというのが一番のポイントです。ここにもいらっしゃるのですが、皆本先生と僕は、実は 1 カ月違いでここに着任したのです。お互い独身だったころには晩ご飯をよく食べに行ったりしていたので、そのときに教務のお話とかもいろいろして、すごく大変そう、自分はやりたくないと思っていたのですけれども、数年前に自分が担当することになって、いざ履修細則などを見ると非常に複雑でした。

今までは、10 年ぐらい前は、教務委員がそれをしっかりと把握していれば良かったのですけれども、その後、チューター制度というのが入りまして、まずプライマリーケアはチューターがやることになっております。そうなったときに、先生方に、全員に履修細則と学生便覧をがっちり覚えろといってもなかなかうまくいきません。船頭が多くなりますと、当然、ヒューマンエラーが起きる可能性が高くなるということで、何とかできないかというのが一つです。

それから、自分が教務委員になってから各種判定をするときに、一枚一枚成績表を見ていろいろやったり、教務課の方が作ってくれた資料を見てということで非常に面倒くさかったのです。その後「ライブキャンパス」というのが入りまして、データはエクセルのワークシートという形で頼めばもらえるようになったという背景がございます。そういう関係で、まずは自分の労力を減らすために作ったのがこれです。

ところが作ってみると、ちょっと工夫すれば、例えばモバイル端末、携帯でも、タブレットでも、パソコンでも、その判定結果を見せることができる。そうなったときにちょっ



とハッと思いまして、ユーザーインターフェースを工夫すれば履修指導に使ってもらえるのではないかと思いまして「きょうむ君」というのを作りました。それを、もともとは学科内の先生の履修指導に使っていたわけなのです。

ですので、最初の設計では自分のところに特化しているので、全学ということは全く考えていなくて、まず動けばいいと思って作ったのですけれども、その後いろいろお話を聞くと、特にラーニングポートフォリオは非常に「後ろ」、過去を見るのにはいいのだけれども、未来にどういう科目を取らなくてはいけないかというのが分かりにくいということが、自分も思いましたし、学科の先生もおっしゃっていました。

ということで、過去を見るのは主にラーニングポートフォリオを使って頂くとして、未来に向けて何を取らなければいけないのか、どういう戦略で取らなければいけないかということを調べるようにして、それをビジュアルで見せるようにしたのがこのシステムです。ちょっとゲーム感覚で、最初は判定部の画面が全部真っ赤なのです。それがクリアしていくと、どんどんどんどん白くなっていくわけです。最終的に卒業に達すると全部白くなるというような、非常に分かりやすいユーザーインターフェースで「ここは赤いやろう。あかんやろう。ここは早く白くしなさい」というような指導をするようになりました。

今は少し改心しまして、もう少しみんなに使ってもらえるように考えた方がいいのではないかとご意見もありまして、まずは理工学部内の教職科目の取れているかどうかを判定できるようにこのシステムをまず汎用化して行って、だんだんいずれは全学で使えるようになるという、あるいはラーニングポートフォリオとか教務システムの中に組み込んでもらえるようなものに育てばいいなとは思っております。以上です。

滝澤：ありがとうございました。何かご質問等ございましたらいかがでしょうか。どうぞ。

石崎：今、説明を聞いて、先ほどの説明では少しついていけなかったのですけれども、未来に向けてということで、非常になるほどと思いました。学生の単位取得の状況を見ていますと、学生が卒業に向けて単位はちゃんと取れているのかどうかということが自分でチェックできていないというか、心配のようなどころがあります。

それで保険のために余分にとっておくということができて、不本意ながら取るということで、学習の意欲がそれほどない中で、でも保険として取っていくという状況がやはりあるのではないかと考えています。一方で、124単位ちょうどぴったりに取っていく学生もいるというところで、その辺の可視化ができれば、ゲーム感覚であればこそ、学生はとても目標に向かっていけるのではないかと考えました。意見になります。すみません。

滝澤：その他、何かございますか。このシステムは教員も学生も使うことができますか。それとも教員が使うのですか。

奥村：今は、学科の教員および教務課職員のみ公開になっております。ただ、チューター一面談のときにその画面を見せたり、あと後援会というのを理工学部でやっていて、父兄に来ていただいて面談みたいなことをやるのですが、そのときにも見ていただくと非常に分かりやすいということです。大学から送られてくる成績表は、色刷りでもないし、むし

ろ実は不可とか放棄があるとページ数が増えるわけです。そうすると、いかにもたくさん取っているように見えるのです。だからそれよりも、本来ならばこれは 2 年の後期に取れているはずなのですけれども、ここがちょっと歯が抜けたように赤くなっているのです。今ちょっと余計め取っているのですよみたいなお話をしたり、あと「なんで留年するんですか」と言われたときに、こうこうこういうわけで、意地悪しているわけではなくて、卒研をやるときにもものすごく足かせになってしまうので、せめて 4 年生になるときにはこれを取っていないとちょっとしんどいぞということで、われわれとしては前もって少しハードルを作っているのだという説明をすると、割と納得していただけるということで、インフォームドコンセントを実現するのに役立っているということです。

この辺は、うちの家内が医師ということもありまして、「学生さんと患者さんは一緒だよ。結局、これからはインフォームドコンセントが重要だよ」と言われておりまして、その一環として見せる、目で見て分かるというのを主眼にしております。

滝澤：ありがとうございます。その他、何かご質問ございますか。これは、先ほど教務の方の「ライブキャンパス」というか、教務データをどこかからの段階でもらわないといけないのですけれども、それを年何回かもらって、入れて、指導に流用されているということですか。

奥村：そうなのです。将来的には業者に権利を売却しまして、作り込んでいただければ、リアルタイムで今度見えるようになります。ただ「ライブキャンパス」を使っている方はお分かりだと思うのですけれども、成績を専用のエクセルシートでアップロードすることができますよね。エクセルシートでアップロードすることができます。そのファイルをそのまま使って、速報を報告することができるようにしてあります。あと、気になる学生とかが生じたときには、それを掲示板形式で学科内で情報共有するようにしております。

滝澤：その他、何かご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

それでは続きまして、農学部的小林先生の方からお願いいたします。

小林：農学部的小林です。そこに書いてありますように、私は、佐賀大学のオリジナル清酒の「悠々知酔」の製造をしておりますけれども、蔵元に学生さんを連れて行き、実際に製造を一緒にするというのをしております。

もともと「悠々知酔」自体は 8 回目になりますが、最初のころは蔵元に丸投げだったものを、私が担当するようになってから、学生さんに少し考えてもらおうということで、酒質、どんなお酒を造りたいかということを考えてもらうことにしました。そうすると、目的酒質を実現するためにはどうすれば、どんな製造法をすればいいかということで、当然いろいろなことを学生自身が考えます。

私は応用微生物学という講義を持っていますので、お酒の造り方は学生さんに教えていますが、実際に製造現場である蔵元さんに行くと全く勝手が違うので、そこでどうやった

ら自分たちが思っているお酒を作れるのかというのを彼らも考えてくれますし、実際にあまりヒントを出さずにやってみろということをやらせているわけです。

実際に発酵が進んでくると、当然、トラブル等も出てきます。それを、彼らが学んだ知識を基にどうすれば回避できるかということも考えることができますし、実際の製造現場で杜氏さんとか蔵人さんたちとコミュニケーションを取って、どうすれば迅速にそういうものに対処できるかということも学んでくれるわけです。

そこに書いてありますように、座学だけではなくて、現場を通して、これから社会人になっていく彼らに何かしらそういうきっかけを与えられればと思って、この授業を今やっております。以上です。

滝澤：ありがとうございます。何かご質問等ございましたらどうぞ。これは先生、対象となる学生はどういう学生が対象でしょうか。

小林：私の研究室に配属になった3年生、4年生と院生です。最初のころは単純作業だけだったので学科の中で希望者を募りましたが、だんだん蔵に泊まり込んでいろいろな作業をすると、多数の学生さんを連れて行ってもちょっとハンドリングが悪いので、今では5~6人でやるという形でやっています。

滝澤：どうぞ。

石崎：フィールドワークに行くに当たって、先生のご負担が学長先生も大変だということをおっしゃっていたのですけれども、5~6人の学生を連れて行って、また授業時間とのかかわりとの工夫は何かされているのでしょうか。

小林：連れて行くのは、当初は全部、私が自分の車で連れて行ったのですけれども、事故があっても困りますので、最近は公用車を使って、しかも総務とか広報の人の空きがあれば運転をしてくれるようになったので、その点は非常に楽になりました。

00 : 45 : 04

授業時間というか、泊まり込んで翹づくりをしたりするので、授業時間がどうこうということとはほとんど考えておりません。やる時は毎日作業の連続で、朝5時に行くとか、泊まり込みもあります。そういう感じです。

石崎：学生は、単位としては授業単位は。

小林：単位は関係ありません。

石崎：関係なくやっているということですね。

小林：はい。

石崎：ありがとうございます。

滝澤：これは、卒業研究とかそういったものの一環というわけでもないわけですか。

小林：直接、卒研とは何の関係もなく、微生物学の応用だということで実践してもらっています。全然違う卒論研究とか修論研究を彼らはやっているのです。

西郡：いいですか。

滝澤：どうぞ。

西郡：高校生とかにいろいろと農学部の説明をするときに、自分はお酒を造りたいという高校生も何人かいます。仮に、小林先生が今の取り組みから手を引かれた場合、その後も継続的に続く仕組みのようなものはあるのでしょうか。

小林：そこはちょっとよく分かりませんが、今のところ定年まであと 15 年ありますので、それまではやっていくつもりです（笑）。

西郡：ありがとうございます。

奥村：醸造学科を（笑）。

滝澤：その他、何かご質問等ございますでしょうか。

中村：そこへ行って、蔵元の人から学生が教えられているなという場面に気付かれたことはありますか。

小林：それはよくあります。その杜氏さんとか部長さんが言うには、学生が来て実際に造りをやると、蔵元の蔵人さんたちも自分たちが何か教えなければいけないということで、学生にいろいろなことを言いますし、彼らも当然それを学ぶわけだし、お互いに非常に刺激になっていいと聞いております。

滝澤：その他ございますか。どうぞ。

石崎：一つのことをやり始めるときのエネルギーというのはとても充実したものになると思うのですが、それを引き継いでいく、特に学生がそれを引き継いでいくときに、そのテンションを維持していくためには、今年の味を決めていくということも一つあると思うのですが、何か工夫している点というものはあるのでしょうか。

小林：最初に味を決めるとかいろいろなことをやって、特に広報活動の一環もありますので、プレス発表の記者会見にも学生も一緒に出るのです。その場でこういうことをやりますと言うと、さすがに彼らもやるしかないということになりますし、今年は岩本理事に広報関係で表彰もしていただきましたし、実際にものができて、味がどンドンどンドン変わっていくのを利き酒しながら、絞りをいつにしようかというときになると、やはりものができてくるときの喜びというのがあるのです。それがやはり彼らの一番のモチベーションだと思います。

滝澤：その他、何ございますか。どうぞ。

山内：実際にお酒を造られることに関わった学生は、就職もそういうところに行ったりする学生もいるのですか。

小林：蔵元さんは小さい蔵が多くて、なかなか人を採ってくれないのです。ただ、前回やった蔵元の社長さんは、うちの研究室の「T君、いいね。うち来てくれんかな」と言っているという話は聞きましたので、今後そういう形になると非常にいいなと思っています。

滝澤：その他、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは続きまして、全学教育機構の青柳先生にお願いいたします。

青柳：よろしく申し上げます。私はデジタル表現技術者養成プログラムの中で、身体表現

入門という授業を持っておりまして、そこで今回、生徒の評価が良かったということで表彰いただくことになりました。

身体表現というのはデジ表の中でどういう位置付けになるかということ、デジ表というのは人間を撮影などしていくわけですけれども、その人間自身がどういう表現をするのかを学ばないと、なかなか実際に撮ることになるとできないので、身体表現というものが教えられているということになっています。

私はもともと演劇の専門家でございます、アメリカの方で演劇をずっと勉強してきました。向こうで助教授などもやっていたこともありまして、身体表現入門を3年前から教えております。

これは演劇的手法といわれるのですが、実は全国的にも知られている手法にだんだんなりつつあります。例えば平田オリザという有名な劇作家・演出家がいるのですが、彼が本当に先駆的にやっていたらっしゃいます。

演劇を使ってどんなことをやるかということ、今の学生に響いているのは、コミュニケーション能力を上げることの実践をするということです。それはちょっと漠然としているので、具体的にどういうことかということ、平田さんもこれは言っていることなのですが、人間というのは演じる生き物ですから、演じ分けることを、その場とか状況によってやっていくのです。その実践を、演劇を使って練習ができるのです。演じることを練習してうまくなるということは、実は社会に出たときに役に立つ。人間関係ですとか、そういうものにどんどん役に立っていくので、人間は基本的に演じることを勉強するべきだという考えが元になっております。

学生達の間でもコミュニケーションということが今どんどんささやかれているのですが、この言葉自体も実は前はなかった言葉です。これも平田先生がおっしゃっていることですが、以前は、コミュニケーション能力というのは遊びとか自然体活動体験の中で育まれていたものですが、時代とか社会の変化によって、だんだん学校とか大学で実践をする必要が出てきたと考えられます。

コミュニケーションに関して、本を読んだり、理論を聞いて勉強することはできるのだけれども、実践をどうやって学んでいいかわからないという学生も多かったので、こういう演劇的手法を使って、最初は体の表現、表情とか言葉を使って表現のトレーニングをやっていくのですが、だんだんやっていくうちに心がほぐれていって、いろいろな人と関わって会話もできるようになっていきます。そのような基礎的なことからコミュニケーションのトレーニングをやっていくという授業になっております。

これは、僕は1~2年生を対象にすることが多いのですが、今、就職時にコミュニケーション能力が必要だといわれていますが、その時点でトレーニングをやっても遅いということが考えられるのです。1年生、2年生のときにやっていくことによって、そのことに意識が付いて、大学生活をやっていく上でどんどん実践をしながら、4年になったときに準備ができていて、それが理想の形ではないかと考えられます。

だから、「コミュカ」と学生は省略して言っているのですけれども、学生たちも常に意識していることなので、これからどんどん必要になっていくものではないかというところで、私もコミュニケーション学会などに参加して、研究を進めている次第でございます。以上です。

滝澤：どうもありがとうございました。では何かご質問等ございましたらお願いいたします。どうぞ。

宮脇：自分は教員養成を主にやっています。比較的コミュニケーション能力が高い学生が多いのですけれども、それでも入学するときにはあまり考えずに入ってきて、いざ学校現場に出ると、見ていると、子どもが怖いという感じの学生さんもおられるのです。そういう学生さんも何とか治るものなのではないでしょうか。

青柳：皆さん、演劇とかお芝居を見られると、俳優さんはすごくコミュニケーション能力が高いと一般的に見られるのですけれども、実はあまり得意ではない人が多かったです。それはやはり練習によってだんだんそれが緩和されていく、自信を持つようになる。コミュニケーション能力を高めるといえるのは、自信とすごく関わってくるのだと思うのです。やはり実践を通して、少しずつ自分が認められたとか、受け入れられたとか、そういうことを体験的に学んでいかないといけないと考えています。

こういう演劇的手法というのは本当に遊び感覚で最初は入っていくので、楽しみながら体験をしていって、表現をしていいのだという感覚が生まれてくる手法ではないかと思います。

宮脇：せりふがあるうちはいいかもしれないですね。相手は子どもさんでいらっしゃるので、児童、生徒さんから、教育実習なんかでも想定外のことを言われると、要するにせりふ、台本がない状態で質問されると、本当に困ってしまう教育実習生もおられるのです。ですから、そういう学生さんであっても、ある程度せりふある状態でコミュニケーションをやっていくうちに、よくあるのですけれども、しゃべることは得意な学生さん、自分たちもそういう職業かも分からないけれども、一方的にしゃべるのは得意な人が、そういういろいろな子どもたちの質問に対してとんでもない答えをしてしまうことが多々あるのです。そういう学生さんでも、先生のトレーニングで良くなる可能性はあるのでしょうか。

青柳：はい。私が初期段階でやっていくのは即興演劇というジャンルなのです。これはインプロ (impro) と英語でいわれているのですけれども、即興演劇というのは自分たちで内容を考えて、その場で演じて、対応力がもともと求められるものなのです。そこで大事なことは、本当に日常の人間関係に役立つようなことが実は含まれています。例えば相手を否定しないとかが、相手の言ったことをまず受け入れてから反応するという理論的な方法があるわけです。そこを踏まえて実践していくことによって、先ほど言われたように、子どもが何か言ってきたときにそれを否定するのではなくて、まず受け入れる姿勢が構築できます。これは英語でもともと作られたので「イエス、アンド…… (Yes and)」という考え方なのです。まず「イエス」して、そして「アンド」で返していくということを即興的に

やる練習をやっていきますので、可能性はあるのではないかと思います。

宮脇：ありがとうございました。

滝澤：その他、何か。

瀬口：非常に興味深いお話ですが、これは学生さんの授業としてやっていただいているのですけれども、例えばわれわれ教員サイドから見た場合に、やはり分かりやすい授業とか、学生の興味を持たせるという面でこういう身体表現能力は必要ではないかと思っているのですが、そのあたり先生はどのようにお考えなのでしょう。例えばこういうものが必要だということであれば、FD等を通して、われわれ教員の方もそういった能力を学ぶべきではないかと思っているのですけれども。

青柳：そうですね。実は先ほど学長の謝辞の中に、大学の先生方というのはもともと何か教えるということをフォーマルに学んできたわけではないとおっしゃっていました。そこは演劇の手法を通じてトレーニングできる部分ではないかと思っています。

普段、あまりこういうお芝居とか、何か演じるということ意識してされたことがない方もいらっしゃるのでは若干、抵抗はあるかも知れませんが、役に立つことではないかと思っています。本当に先ほど言った即興演劇という基本的なことを体験すると、相手を受け入れる姿勢ができたりしますので、非常に有効ではないかと思っています。

それに付随して、教員養成の方でこういう手法を取り入れているという事例もたくさんあります。例えば北海道教育大学は、3年間に及んで演劇のプロと一緒に入れて、文科省の特別経費で研究を進めて、実際に効果を生んでいるという報告書も出ています。そういうこともありますので、全国的に目立つようになってきたことではないかと思っています。

瀬口：ありがとうございます。

滝澤：教育の効果の出る期間は、長ければいいのでしょうかけれども、例えば大学入門科目の中の一コマでやるとか、それからスキルアップセミナーの90分から120分ぐらいの間でやるというだけでも、それなりの効果は期待できると考えるよろしいでしょうか。

青柳：そうですね。私も実はこういう大学ばかりではなくて、いろいろな自治体とか団体でセミナーをやってくれということもありますので、単回でもある一定の効果は得ることができると思います。ちょっと考える時間になるのではないかと思います。

滝澤：その他、何かご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。ではどうもありがとうございました。

青柳：ありがとうございます。

滝澤：それでは最後に、アドミッションセンターの西郡先生の方からよろしく願いいたします。

西郡：この取り組みのきっかけは、拡大役員懇談会で、入学者の質を確保するためにどうすればいいのかということを経験提起をしたところから始まります。質を確保するためには入試制度の変更とか入試広報など、様々なアプローチがあるのですが、佐賀大学憲章では「学生中心」をうたっておりまして、そういったものをもっと高校生に知ってもらうこ

とが必要ではないかということで、いろいろと考えたのがきっかけです。

「学生中心」というのを発信する際に、一番高校生の目に触れるのは、高大連携活動や入試広報活動において在学生の活動を見せることが非常にいい結果を生むのではないかと考えました。ですが、いざ在学生を巻き込んで活動してもらおうと思ってもアドミッションセンターではノウハウがありませんでした。そこで全学教育の山内先生に併任教員になっていただいて、いろいろとアドバイスや実際の活動を中心にやっていただきました。ですので、この表彰を私が受けるというのは非常に心苦しいところがあります。ただ、アドミッションセンターの本務は、在学生の教育とあまり関係しないのですが、高大連携や入試広報活動といった業務の場に学生の教育活動の場をある程度提供できたところを評価していただいたのではないかと考えています。

この活動は正課の教育活動ではありませんので、あまり学生に対する拘束力はありません。そうなったときに、学生の組織をしっかりと作ることは非常に難しい問題でした。このところを山内先生といろいろ相談しながら、どうしていけばいいのかと考えているところです。また、これまでの活動を振り返ったときに、高大連携とか入試広報などはインターフェース科目やアクティブラーニングに通じる部分があるのではないかと思いますので、こういったものを正課の授業等に取り入れていくことも1つの可能性ではないかと思っています。

滝澤：ありがとうございます。それでは何かご質問等ございましたら。これは大体、学生は毎年、何名ぐらいが関わっておられるのですか。

西郡：毎年、各イベントでは単発的に学生は集まるのですけれども、継続的に関わっているほんの2~3名です。それをもっと組織化するために今考えているのは、学生広報サポーターという枠組みで、大きな枠組みで学生を取っておいて、その中でいろいろと活動を割り振っていかうかと考えているのですけれども、何しろ人が集まらないというのが現状の課題です。

滝澤：その他、何かございますでしょうか。どうぞ。

帯屋：理工学部では推薦入学で入ってきた子、特に実業系で入ってきた子の学力不足がものすごく顕在化していて、教育の最前線で教えている先生たちはものすごく悩んでいるのだけれども。今ご提案されたような、推薦入学で入った子をそういうところに活用していただいて、高大連携に持っていくというアイデアは採用できないですか。

西郡：そういった情報を今初めて聞きましたので、ぜひそういったアイデアはどんどん取り込んでいきたいと思います。

滝澤：その他、何かございますか。今は学生に募集をかけるというところもなかなか難しいのですか。

西郡：そうですね。説明会を開いても、学生に今声を掛けても、いろいろサークルとか何だかんだ決まっていてなかなかうまく捕まえることができないので、来年度からは4月の時点である程度、組織的に広報していこうかと考えています。



滝澤：他、何かご質問等ございますか。どうぞ。

中村：学生にいろいろ頼むときに、昔だと自治会みたいなものがあった、何かあったらよく自治会の学生に頼むとか、現在の経済学部だったら学生がつくっているゼミナール連合会があって、そこに頼むのです。それだとそのグループがやっている他のイベントもあります。例えばオープンキャンパスのときに協力を頼むとそのことで活動してくれるけれど、他にも学生の活動があるから、4月に学生が入ってきたときに募集をかけて、そうしたら興味のある人がいろいろな活動をやっているからといって入ってくるのです。やはり年間を通していろいろなイベントがあって、それに関わっていくというと集まるのでしょうか。突然、単発的にこの活動だけというのはなかなか難しいのではないのでしょうか。でもこれは読むと、結構1年間を通していろいろな活動があることにはなっているのでしょうか。

西郡：それをプロジェクトというか連携だつてうまく学生を集めきれしていないので、そこが次の課題かと。

中村：いろいろなことがあるよといって、ずっと集まっては活動できるというようになっていて、学生も楽しいのかなと思います。

西郡：ありがとうございます。

瀬口：今はどういう方法で学生さんを集めているのでしょうか。先生の授業を通してですか。

西郡：私の授業を取っている学生や山内先生が知っている結構モチベーションの高い学生とかに頼んで、人を集めてもらっているという段階です。

滝澤：よろしいでしょうか。その他、何かご質問等ございますでしょうか。どうもありがとうございました。

それでは以上をもちまして、表彰等を受けられた先生との懇談会を終了させていただきたいと思います。最後に、高等教育開発室の方から少しお願いがあるのですが、先生方の非常に進んだ取り組み等を、できれば各学部のFD講演会などでご紹介していただくとか、グッドプラクティスという形で少し大学のホームページに載せるということも考えておりますので、そういった声が掛かったときにはぜひご協力の方をよろしく願いいたします。

それからもう一点、これは認証評価とか評価観点からのお願いになるのですが、いろいろな取り組みで現在評価の方で問題になるのは、その成果をちゃんと出ているかということをよく言われるわけなのです。ですから、少しでも学生の方にそういった取り組みの後に例えばちょっとアンケートをしておいていただいて、学生からの成果が挙がっているというようなことを少し集めておいていただければ非常にありがたいと思っています。実際に学生が成長したかどうかというのはなかなかそういったものではつかみきれないとは思いますが、少し形式的にはなりますけれども、そういったことも今後取り組んでいただければと思っています。以上でございます。

今日は長時間、どうもありがとうございました。